

# 緑と水と光に恵まれた

## 未来に続く 南筑後の農業



福岡県南筑後普及指導センター

平成24年3月

## 表紙写真の説明

県ブランドの  
イチゴ品種  
「あまおう」

センター管内  
の基幹品目  
「博多なす」

改植更新を推  
進している果  
実品質の良い  
ミカン品種  
「北原早生」

新品種導入推  
進  
県育成品種  
「紫香の舞」

県育成の高温  
耐性水稻品種  
「元気つくし」  
のパッケージ  
デザイン

肉質向上を推  
進し、おいしい  
と評判の牛肉  
「博多和牛」

女性農業者経  
営力向上講座  
「大型農業機  
械安全操作研  
修会」

雇用型農業を  
めざす農家等  
を対象とした  
「農業経営  
研修会」

大木町大莞（お  
おい）小学校の  
学童農園「水稻  
栽培体験」

## はじめに

昨今の農業・農村を取り巻く情勢は刻々と変化し、東日本大震災とそれに伴う原子力発電所事故の影響による放射能汚染、ギリシャなど欧州の財政危機に端を発した株価下落、急激な円高の進行など社会・経済は不安定な状況にあります。

このような状況下、農業・農村でも、農業者の高齢化の進展、担い手不足、景気や消費低迷による農産物価格の下落のなど、産地や農家経営の発展にとって避けて通れない多くの問題を抱えています。

一方、近年の地球温暖化により農産物の生育や栽培管理に影響が出てきており、昨年6月の長雨では、麦の収穫遅れによる品質低下や収穫不能によるすき込み田の発生など大きな被害が出ております。

このような中、当普及指導センターでは以下の4課題を普及活動の柱として農業者、関係機関・団体と連携し、諸課題の解決に取り組みました。

- (1) 県農業を担う経営能力に優れた農業者の育成
- (2) 競争力の高い産地の育成
- (3) 安全・安心な農畜産物の生産及び持続性の高い農業生産の実践支援
- (4) 都市との共生をめざす地域づくり支援

水田農業における規模拡大や法人化などの担い手育成、園芸農家の雇用型経営の導入促進、新規就農者の技術向上対策、新品種・新技術の導入、ブランド化への取組支援などにより、地域農業の振興と農家経営の改善に努めてまいりました。

本冊子は、当普及指導センターの活動を農業者や関係機関・団体の方々に広く理解して頂くために、23年度の主な活動成果について取りまとめたものであり、地域の農業・農村の活性化と農業者の方々の経営改善の一助になれば幸いに存じます。

平成24年3月

福岡県南筑後普及指導センター長 菊池一幸



# 目次

I 普及指導センターの活動体制	1
-----------------	---

II 普及指導活動の方針	2
--------------	---

## III 普及活動の主な成果

### 農業者の育成

[1] 生産性の高い水田農業担い手の育成 〈重点課題〉	3
[2] 将来を担う農業者の確保・育成	5
[3] 麦わらすき込み田の水稻栽培管理技術を確立	6
[4] 新規就農者への支援によるイチゴ産地の維持	7

### 競争力ある産地育成

[5] 花き経営の安定を目指して	8
[6] ひとづくり・ものづくりによる多様な園芸産地づくり 〈重点課題〉	9
[7] 果樹産地構造改革計画の実践によるミカン産地の活性化	11
[8] 和牛繁殖農家の経営安定	12

### 安全・安心な農業生産の実践支援

[9] ナスにおける新たな害虫防除技術の現地実証	13
--------------------------	----

### 都市と農村の共生

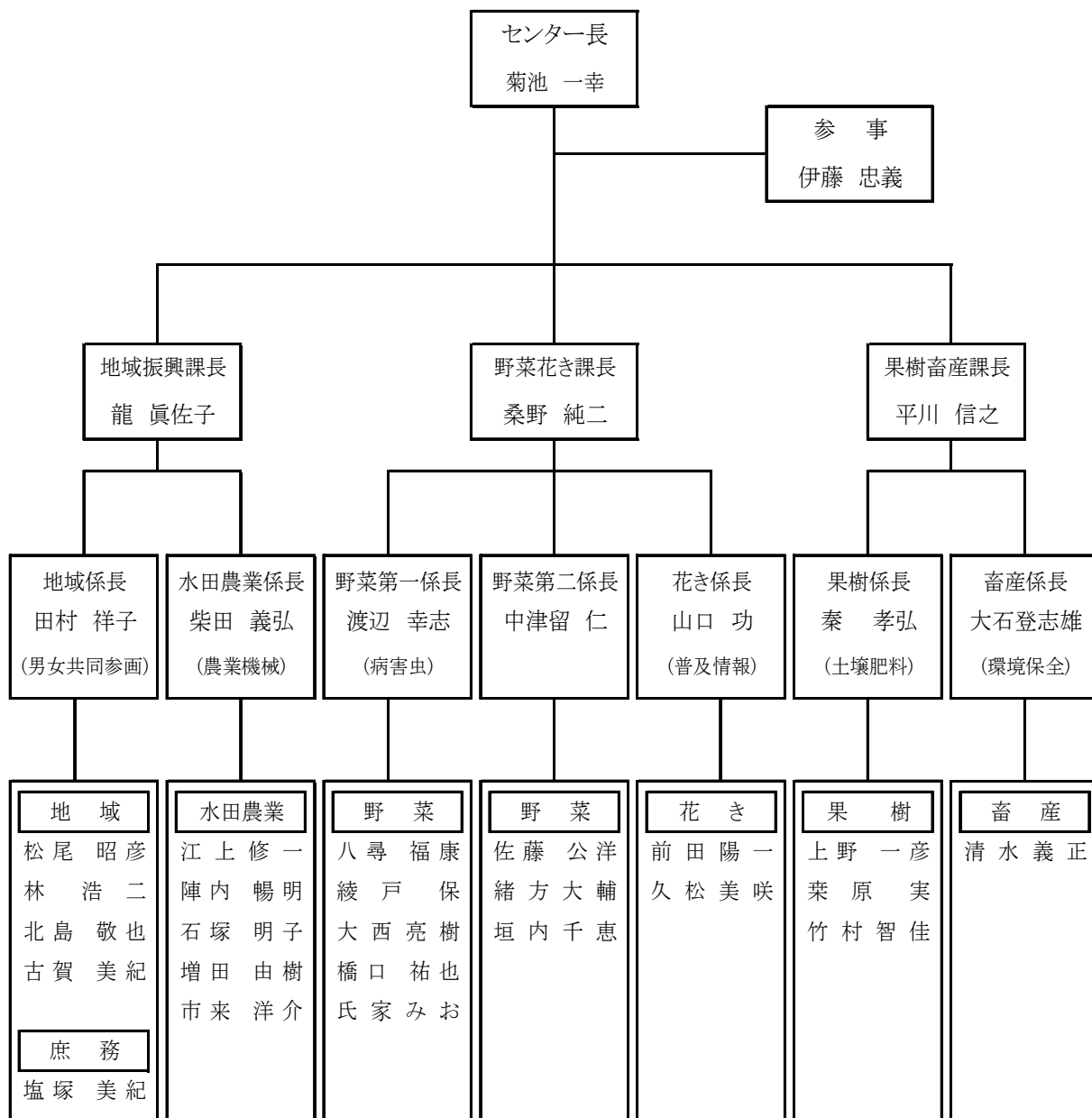
[10] ほ場整備地区農業の活性化 〈重点課題〉	14
--------------------------	----

### 《参考資料》

[1] 平成 23 年気象概況	16
[2] 平成 23 年度気象災害の発生概況	17
[3] 平成 23 年度現地情報一覧	18
[4] 平成 23 年度主な展示ほの概要	20

# I 普及指導センターの活動体制

所 在 福岡県みやま市瀬高町下庄800-7  
 TEL 0944-62-4191  
 FAX 0944-63-4643  
 e-mail nanchiku-dlc@pref.fukuoka.lg.jp



※ ( )は窓口

## Ⅱ 普及指導活動の方針

### 農業者の育成

- ・雇用力の高い農業経営者の育成
- ・青年農業者・新規就農者の育成
- ・意欲ある女性農業者の育成
- ・生産性の高い水田農業担い手の育成

### 競争力ある産地育成

- ・実需者に選ばれる米・麦づくりの推進
- ・い業経営の安定化支援
- ・規模拡大等による野菜の産地活性化
- ・ブランド化推進による果樹の産地再構築
- ・特色ある花き生産による経営の安定
- ・技術力向上による畜産経営の安定

### 安全・安心な農業生産の実践支援

- ・安全・安心な農産物づくりの推進
- ・減農薬・減化学肥料栽培に取り組む農業者への支援
- ・エコファーマー認定者への支援

### 都市と農村の共生

- ・地域の資源を生かした農業農村の活性化
- ・地域の特性を生かした特産品開発への支援

### [1] 生産性の高い水田農業担い手の育成

～地域と調和した力強い担い手づくりの取組～

#### 1 課題化の背景・活動内容

管内の水田農業担い手の状況は、以下のとおりである。

表1 水田経営所得安定対策加入担い手数（平成23年度）

・個別担い手（認定農業者）	131
・農業生産法人	10
・特定農業団体	18
・特定農業団体と同様の組織	87

これらの担い手組織や個別担い手については、国の経営所得安定対策及び戸別所得補償制度が実施される中で、地域と調和した力強い水田農業の担い手となるべく、経営基盤の一層の強化が必要であった。

そこで、市町、JAと協力・連携し、担い手組織に対しては法人化への支援をはじめ、組織運営に関する様々な情報提供や先進地視察研修等を通じて活動の充実を図った。個別担い手に対しては、規模拡大に向けての技術指導や経営改善支援を行った。

#### 2 主な成果

##### (1) 個別担い手の経営改善

経営面積が概ね10ha以上の認定農業者3戸に対して水稻栽培に関する技術支援や経営コンサルティングを重点的に行い、うち1戸が15ha以上の規模拡大を実現した。

##### (2) 新しい法人組織の設立と運営支援

大牟田市の（農）「宮崎」は、平成22年度末に法人設立しているが、その後も関係機関と連携し新規作物（そば）の導入をはじめ、組織の円滑な運営について支援を行った。

みやま市の（農）「本郷」は、関係機関とともに法人化への合意形成に向けた研修会・説明会等の支援を継続し行った結果、平成23年5月に法人設立した。また、既存の法人組織である柳川市の（農）「アグリ柳川」が、水田農業経営力強化事業を活用し、アドバイザーで



写真1 「本郷」設立総会



ある税理士から税務及び適正な法人会計について助言・指導を受けた。

同様に、大木町の（農）「雲雀」も、アドバイザーである社会保険労務士から労災保険及び労務管理について助言・指導を受け、さらに、園芸品目であるイチゴやアスパラガスの栽培管理指導も継続して行った。



写真2 「雲雀」労務関係助言指導



写真3 集落営農組織の法人化研修会

その他、法人化を志向する組織に対しては、法人化について集落説明会や役員による検討会等への支援を行った。その結果、2組織において法人化準備委員会が立ち上げられ、法人設立に向けた具体的な検討段階に入った。

### (3) 担い手組織リーダーが法人組織先進事例に学ぶ

23年11月に生産組織リーダー研修会を開催し、兵庫県の広域法人組織「八幡営農組合」の代表者から、組織運営をはじめ、米麦大豆・野菜の生産に加えて、加工・販売の6次産業化や地域の多様な人材の活用についての先進的な取組を学んだ。



写真4 生産組織リーダー研修会（兵庫県・八幡営農組合の事例）

# 農業者の育成

## 〔2〕 将来を担う農業者の確保・育成

～ 雇用就農をきっかけに独立就農へ ～

### 1 課題化の背景・活動内容

当普及指導センターでは、将来の農業者の確保・育成の取組の一環として新規に就農を希望する人の相談に応じている。今年度は27件と昨年度(19件)と比べて増加の傾向にあり、そのうち他産業からの就農希望者の相談件数は23件と多数を占めた。具体的にはアスパラガス経営を希望する人が9件、イチゴ経営は8件であった。

他産業に従事していた人が就農するためには、農地や資金の確保、栽培技術の習得などの課題がある。このため、当面は、農家や法人への雇用をすすめ、栽培技術や経営のノウハウの習得を図るとともに就農への条件整備に向け、市町、JAと連携して、補助事業や融資等の対応を含め経営計画策定を支援した。

### 2 主な成果

#### (1) 雇用型経営を目指す農家へ就業

アスパラガス経営を希望する人のうち3名が、農業人材確保支援事業を活用して、管内のアスパラガス農家に雇用され、7～10か月間栽培技術を学ぶことができた。その間、他のアスパラガス部会員と積極的に交流を図り、人脈を広げるなど将来の就農に向けた準備に取り組むことができた。また、イチゴ経営を希望する1名も県の農業大学校研修科に通学しながら、イチゴ農家で栽培技術を学んだ。

#### (2) 雇用就農から独立就農へ

アスパラガス経営希望者の3名のうち1名は、ハウス設置等の準備を進め、平成24年3月に苗を定植した。もう1名は、25年のアスパラガス栽培開始に向けて市、JA、普及指導センターの連携による支援のもと準備を進めている。

イチゴ経営希望者は、普及指導センターや関係機関と相談を重ね、就農施設等資金を活用して、24年からイチゴ栽培を開始することになった。

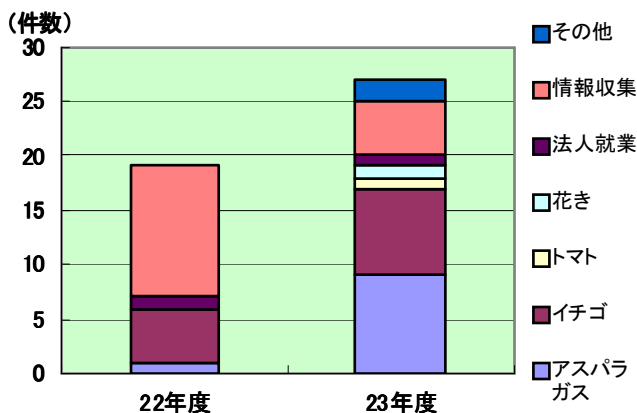


図1 就農相談件数と内容



写真1 経営計画策定の様子

# 農業者の育成

## 〔3〕 麦わらすき込み田の水稻栽培管理技術を確立

～今年の現地調査データなどを基に対策技術を組み立て～

### 1 課題化の背景・活動内容

平成 23 年は、6 月の連続降雨の影響で麦類の収穫作業が遅延し、麦わらのすき込みを行ったほ場が多かった。また、やむを得ず麦子実まですき込んだほ場もあり、水稻作にて、子実やわらの分解によるガス害により初期生育が不良となったほ場も見られた。

そこで、過去に農業総合試験場で行った関連試験結果などを基に、落水によるガス抜き、浅水管理、基肥増等の対策技術を組み立て、J A等を通じて農業者に対する技術支援を行った。また、現地の状況把握と対策技術の効果や問題点を検証するため、技術展示ほや調査田の設置を行った。

### 2 主な成果

(1) 迅速な技術情報の提供により、すき込みによるガス害など悪影響を軽減することができ、ほぼ平年並みの収量・品質を確保できた。

(23 年「ヒノヒカリ」の平均収量は 480kg/10a 程度)

(2) 現地ほ場の調査から、浅水管理など適切な水管理の有効性を確認し、農業者に対してこのような基本技術の重要性をあらためて訴えることができた(表 1)。

表 1 現地「ヒノヒカリ」の調査結果

	精玄米重 kg/10a	同左比率 %	m <sup>2</sup> 当り 粒数 ×100粒	登熟歩合 %	m <sup>2</sup> 当り 穂数 本
対照区(麦わら無し) 瀬高	396	100	—	—	380
麦わらすき込み 瀬高	363	92	—	—	342
参考ほ 例年半分すき込み田 瀬高	491	—	325	73.0	427

(参考区の水管理: 浅水管理の継続)

麦わら施用したヒノヒカリで、水管理に配慮しなかった場合は、減収した。水管理を徹底すれば、すき込みを毎年継続しているほ場でも、収量は安定している傾向。

表 2 現地「つやおとめ」「元気つくし」の調査結果

	精玄米重 kg/10a	同左比率 %	m <sup>2</sup> 当り 粒数 ×100粒	登熟歩合 %	m <sup>2</sup> 当り 穂数 本
つやおとめ すき込み無し区	417	100	375	66.0	419
つやおとめ 麦わらすき込み区	376	90	433	46.4	510
麦子実をすき込んだ「つやおとめ」は、過繁茂となり、千粒重・登熟が下がり減収。					
元気つくし 麦わら無し区	566	100	345	85.4	473
元気つくし 麦わらすき込み区	612	108	407	77.6	538

(水管理: ガタ掻き+浅水管理の継続)

麦わら施用した「元気つくし」では、粒数が多く登熟がやや下がったが収量は+8%

(3) 現地ほ場調査により、すき込み時の対策技術の有効性を確認し、今後同様のことが起こった場合の対策を下記のように取りまとめた。

- ① 麦わらすき込みの水稻への影響は、品種によって異なり対策も変える必要がある。
- ② 「夢つくし」～「ヒノヒカリ」の品種では、基肥増 + 初期浅水管理にて初期生育を確保し、ガス害を回避する。
- ③ 「つやおとめ」以降の品種では、生育期間中の回復が見込めるため増肥はしない。
- ④ 浅水管理により雑草が増加するため、中期除草剤使用等の対策が必要。
- ⑤ やむなく子実すき込みをした場合の施肥法(案): 基肥 50%減+穂肥なし。

また、新品種「元気つくし」は、麦わらすき込み田においても生育が良好である可能性を示すことができた(表 2)。

# 農業者の育成

## 〔4〕新規生産者への支援によるイチゴ産地の維持

～イチゴ新規生産者講座で技術・経営力の向上～

### 1 課題化の背景・活動内容

イチゴの作付面積が減少傾向にある中、管内の過去3か年の新規生産者は25名で、Uターンや農外からの新規参入が多く（図1）、初めてイチゴを栽培する生産者に対する支援が必要とされていた。

そこで、イチゴの生産希望者の就農相談に対応するとともに、イチゴの経営を始めて3年以内の新規生産者を対象に栽培管理方法などの講座を実施し、新規生産者の育成に努めた。

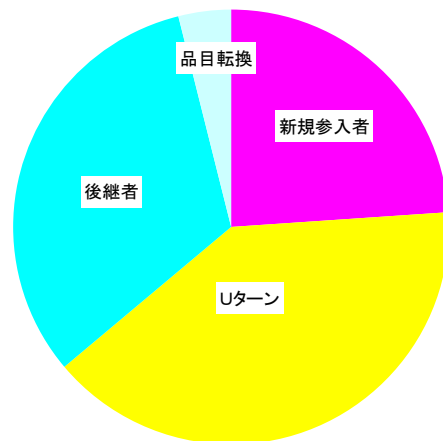


図1 H21～23年度のイチゴ新規生産者の内訳

### 2 主な成果

#### (1) 新規生産者の確保

イチゴ経営を希望する就農者からの施設や資金等の相談について、関係機関と連携し、平成23年度は4名が新たに就農した。24年度も6名が新規に就農希望する予定である。

#### (2) 新規生産者の基礎的技術習得

5回の講座において、イチゴの生理生態や管理、先進農家での研修を行った。

特に、3年前に新規に生産を始め、高い単位収量を上げているT氏のは場を視察した際、日頃の栽培管理や篤農家からの情報を詳細に記録、実践している様子に受講者は感心していた（写真1）。



写真1 現地での講座

アンケートでは、「基礎から学ぶことができた」「資料が分かりやすかった」など半数が講座の内容に満足しており、多くの方が今後も講座の継続を希望していた。

今後も受講者の意見を参考に講座の内容を充実し、開催していきたい。

## [5] 花き経営の安定を目指して

～新品種導入推進と情報発信の強化～

### 1 課題化の背景・活動内容

普及指導センターは、花き経営の安定を図るため、新品種を推進する農家を選定、各農家に情報提供などの推進を図るとともに、栽培技術向上を支援し、普及定着に取り組んだ。また、JAみなみ筑後の「エメラルド」をモデルとして、生産情報の提供や需要喚起の取り組みを支援し、情報発信の強化を図った。

### 2 主な成果

#### (1) 新品種の導入

新品種導入農家は平成21年8戸、平成22年18戸、平成23年21戸と増加した。ダイアンサスは導入当初は2戸、現在6戸まで増加し、切り花生産農家に定着した。ホオズキは現在3戸が共同出荷に取り組んだ。



写真1 ダイアンサス研修会

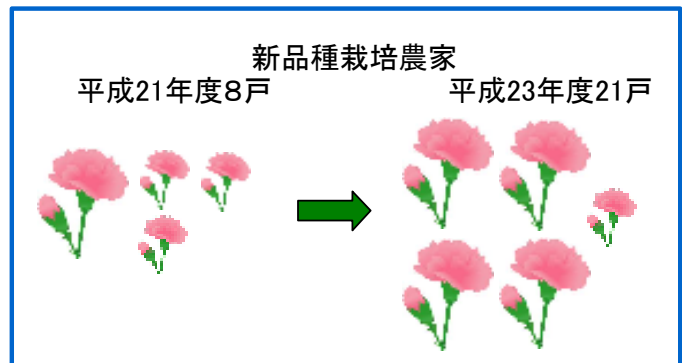


図1 新品種栽培農家の推移

#### (2) 情報発信による安定販売

JAみなみ筑後エメラルド研究会は、出荷箱へリーフレット添付や各種イベントへ積極的に出展するなどの情報発信に取り組んだ。

これらの結果、エメラルドは海外への輸出やけいこ花の花材としての需要が増加し、販売単価は安定した。



写真2 添付されるリーフレット



写真3 エメラルドのアレンジ

### [6] ひとつづくり・ものづくりによる多様な園芸産地づくり

～雇用型園芸農家の育成と地元産業等との連携による農産加工品の開発～

#### 1 課題化の背景・活動内容

柳川地域の園芸農業は、施設野菜（ナス、イチゴ、トマト、アスパラガス）を基幹とする多様な産地である（表1）。65歳以上の割合は54%を占め、園芸農家の減少が懸念されている（図1）。

そこで、普及指導センターは、柳川市やJA柳川、園芸関係の生産部会長等で構成された雇用システム実証会議に参画した。その中で協議を重ね、ナス、イチゴ、トマト、アスパラガス生産農家を対象とした雇用に関するアンケート調査や雇用型園芸農家育成のための先進地調査等を実施し、雇用等を活用した規模拡大モデル農家への誘導や販売額の増加を目指す取組を行った（写真1）。

表1 JA柳川園芸部会の概要

単位：戸、ha

部会名	なす	いちご	とまと	アスパラガス	レタス	にら	オクラ	ぶどう	いちじく	花き
戸数	75	50	20	31	41	10	173	65	40	13
面積	21.5	11.8	5.0	5.9	23.8	1.0	10.0	16.6	6.6	4.5

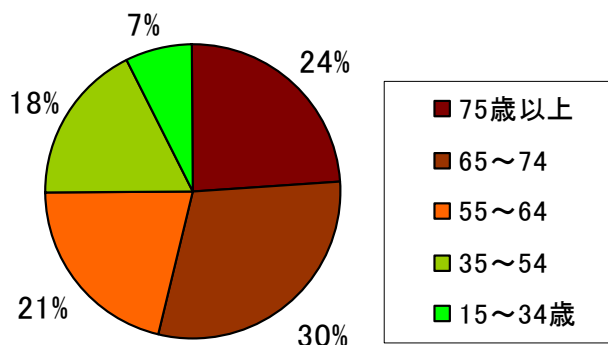


写真1 イチゴ雇用型経営先進地調査

図1 農業就業者年齢構成

柳川農産物特産品づくり推進協議会では、市、JA、普及指導センターの実務担当者として外部アドバイザーにより「めしおせプロジェクトチーム」を新たに設置した。

そこで、市場出荷できなかった規格外品等を活用した農産加工品を開発、商品化するため、試食アンケートによる消費者の嗜好性把握やPR方法の検討等、マーケティング活動の取組を支援した（写真2、図2）。



写真2 試作品の評価

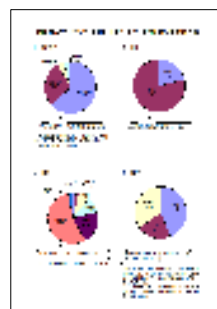


図2 試食アンケート結果

- ・味やコンセプトについてはおおむね高評価
- ・量と価格のギャップあり  
その他…
- ・食べ方や活用方法などの消費者嗜好について

## 2 主な成果

### (1) 施設園芸農家の規模拡大

雇用導入農家を中心に、施設園芸農家の規模拡大があった（表2、写真3）。

表2 規模拡大農家数

品目名	農家数（戸）
ナス	6
イチゴ	3
トマト	3
アスパラガス	2



写真3 補助事業を活用してハウスを増設

### (2) 農産加工品開発、商品化

地元農産物を使った新たな加工品開発に成功し、JA柳川より商品化された。

平成23年度に商品化された商品

- ・「あまおう」、「そら豆」、「米粉」柳川アイス（写真4）
- ・「あまおう」アイスクャンデー（写真5）
- ・豆乳を使用したマヨネーズ風調味料「柳川まめマヨ」（写真6）
- ・オクラ、大豆、有明のりを使用した「ご飯の大関」（写真7）



写真4 柳川アイス



写真5 あまおうアイスクャンデー



写真6 柳川まめマヨ



写真7 ご飯の大関

# 競争力ある産地育成

## [7] 果樹産地構造改革計画の実践によるミカン産地の活性化

～優良品種への転換支援～

### 1 課題化の背景・活動内容

みやま市、大牟田市は温州ミカンに適した土壌と気象条件により銘柄産地を築いてきたが、生産者の高齢化、担い手不足、販売価格の低迷により農家数や栽培面積の減少が問題となっていた。そのような中ミカン産地を活性化させるため、柑橘部会、JA、市等の関係機関とともに「果樹産地協議会」を設立し、協議を重ね「果樹産地構造改革計画」を策定した。その基本方針の一つである優良品種への転換に関係機関と連携して取り組み、座談会や導入園地視察研修を通して改植更新を推進した。

### 2 主な成果

#### (1) 優良品種への改植更新の増加

座談会での「果樹産地構造改革計画」の周知や、優良品種導入園地への視察研修を行ったことにより、優良品種への関心が高まり、「北原早生」、福岡3号、福岡4号への改植更新が急増した。

#### (2) 優良品種の生産量増大

優良品種「北原早生」への改植更新や高接ぎ更新後に、初期収量向上、早期成園化を目的として、枝梢・結実管理等の指導を徹底した結果、生産量は6 tから97 tへ増加した。

#### (3) 市場、消費者から高評価を得る

「北原早生」は高糖度で食味が良いため、市場や消費者から「すばらしい」、「増産してほしい」との極めて高い評価を得た。



写真1 進む改植更新

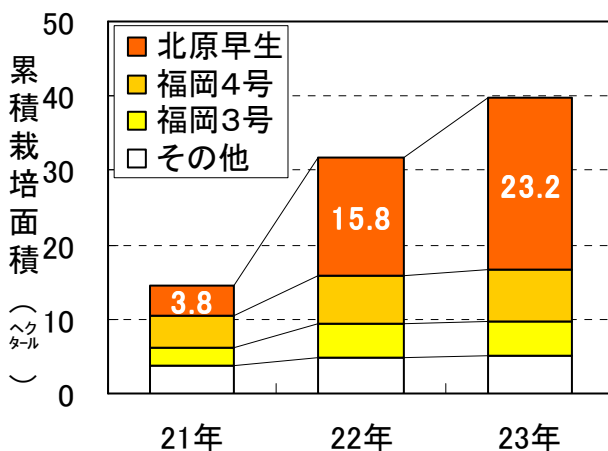


図1 改植面積の推移



写真2 園地視察研修



# 競争力ある産地育成

## [8]和牛繁殖農家の経営安定

～繁殖成績改善による所得向上～

### 1 課題化の背景・活動内容

管内の黒毛和牛繁殖農家では、昨年までに、子牛を市場平均価格以上で販売できる技術が定着してきた。

さらなる所得向上のために、経産牛の飼養管理の改善を指導し、繁殖成績の向上を図った。

### 2 主な成果

#### (1) 各農家の繁殖成績向上意欲の醸成

農家毎の繁殖成績を調査し、各自の繁殖成績の現状と問題点を認識してもらう取り組みを進め、繁殖成績の向上意欲を高めた。

#### (2) 経産牛の飼料給与技術の改善

分娩前、分娩後、種付け時期、妊娠期の各ステージに応じた飼料給与メニューの提案、運動スペースの確保、ビタミン・ミネラル等の給与改善を指導し、経産牛の飼料給与技術が定着してきた。

#### (3) 繁殖成績の改善

繁殖管理のため、各農家の経産牛台帳を作成配布し、分娩後の種付け開始時期の把握、発情が認めにくい牛の繁殖検診の励行、イージーブリードの活用推進により、繁殖成績が改善した農家が増えてきた。

#### (4) 経産牛の更新による分娩率の向上

繁殖成績が悪い農家は、経産牛の血統がよいために、高齢・高産歴になっても淘汰できずにいたので、中長期的な更新計画を検討し、計画的な更新を実施するよう指導した。その結果、分娩率は、昨年と比較して3%（12戸の平均）向上し、うち4戸の農家では10%以上飛躍的に向上した。

※ イージーブリード：牛の発情同期化と鈍性発情、卵巣静止の治療を目的とするプロゲステロン放出膈内挿入剤



写真1 和牛繁殖研修会

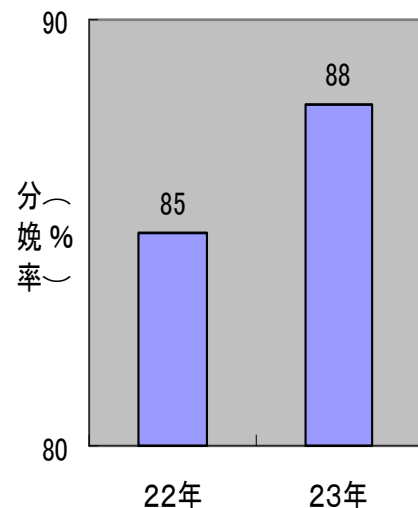


図1 分娩率の推移

## [9]ナスにおける新たな害虫防除技術の現地実証

～天敵スワルスキーカブリダニの活用～

### 1 課題化の背景・活動内容

近年、ナス等において薬剤抵抗性の発達した害虫が増加し、当管内の産地としても問題となっている。そこで、これらの難防除害虫に対して高い防除効果を示すスワルスキーカブリダニ（以下、「スワルスキー」）を活用した新たな防除体系の普及を図るため、現地実証を行った。さらに、ナス生産者に対して、スワルスキーに関する研修会を開催し、スワルスキー導入について働きかけた。

\*スワルスキーカブリダニとは、体長0.3mmの捕食性のダニである。捕食範囲はアザミウマ類、コナジラミ類、ホコリダニ類等で、施設のキュウリやピーマンで高い防除効果が確認されている。



写真1  
スワルスキーカブリダニ(右)

### 2 主な成果

#### (1) 半促成ナスで防除効果を実証

6戸の生産者がスワルスキーを導入した。そのうち4戸の生産者において、スワルスキーによる害虫の防除効果が確認され、農薬の総散布回数を慣行の52%に減らすことができた。他の2戸はスワルスキーに悪影響のある農薬を使用したため、スワルスキーがうまく定着しなかった。

#### (2) 促成ナスでの実証試験

スワルスキーによる害虫の防除効果を実証するため、1戸の生産者が導入した。促成ナスの場合、厳寒期にスワルスキーが減少することが課題であり、その対策として、スワルスキー2回放飼や耕種的防除の併用を検討し、防除技術の確立に向けた実証試験を行っている。

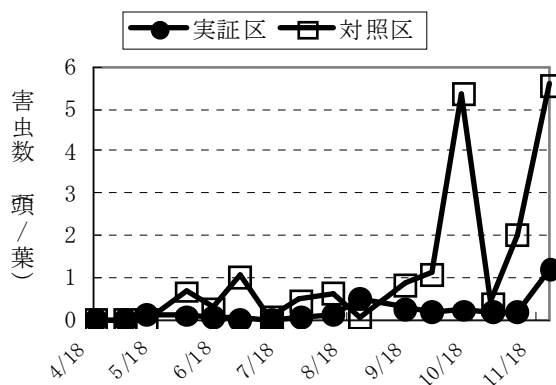


図1 半促成ナスにおける害虫(アザミウマ)の推移



写真2 天敵放飼の様子

## [10] ほ場整備地区農業の活性化

～山川地域の活性化支援の取り組み～

## 1 課題化の背景・活動内容

みやま市山川町では、カンキツを基幹とした農業が営まれてきたが、平成18年度から、水田のほ場整備を実施し、平成20年度に全40haの面工事が完了した。ほ場整備後の水田農業のあり方を検討するために、農業関係組織の代表で構成される「山川の明日の農業を考える会」が設立され、農業者自らが考え、実践しようという取組が始まった。この会を基軸に機械利用組合設立や水稻の減農薬・減化学肥料栽培、女性グループによるカンキツ補完品目となる露地野菜の試作、加工グループの結成と加工品試作・販売等の取組を積極的に支援した。

## 2 主な成果

## (1) 営農計画（ビジョン）策定に向けた活動方策の検討支援

ほ場整備地区における営農ビジョン策定を働きかけ、農家リーダーからなる山川町営農ビジョン策定委員会を設置し、担い手や営農状況についての情報収集や意見交換を行い活動方策の検討を進めた。

今年度は、地域の現状及び課題をもとに骨格となる、「後継者の育成」、「山川農産物生産力アップの基盤づくり」、「多様な販売アイテム・販売方法の構築」、「地域資源の活用による山川のファンづくり」といった4つの大テーマと「外部労力活用」、「水稻生産」、「新規作物導入」ほか8つの中テーマが樹立できた。今後は各テーマに沿った具体的な取組について検討し、ビジョン策定に向け推進していく。



写真1 ビジョン検討会

## (2) 機械利用組合の活動強化により作業受託面積が増加

実作業の担い手である機械利用組合（設立2年目）について、水稻収穫受託作業面積が設立初年度の6.9haから9.5ha（ほ場整備地区の24%）に増加した。これは、役員会を通じて地区内の農家へ作業の共同化による生産コストの低減効果を啓発した結果、作業委託のメリットが認知されたためである。

新たに今年度より田植作業の共同化にも取り組み、4.3haを受託した。これは、施肥同時田植機を導入したこと及び肥料、農薬の共同購入も併せて行い、作業委託のメリットを示したことによる。



写真2 水稻収穫共同作業

さらに組合構成員の中で、減農薬・減化学肥料による水稻栽培に取り組む生産者がいるが、地力が低く収量が伸びないという課題に直面していた。そのため、地力向上対策として堆肥施用の展示ほを設置し検証した結果、展示区の収量が慣行区を上回る結果となり、堆肥投入の効果が実証され、今後の栽培指導に反映させる。

組織活動の活性化方策として「山川米のニックネームを考える」、「山川米の生産販売拡大戦略」、「法人化を想定した新たな展開」の3つの戦略を組み立てたことで、組織活動の目標が明確になった。



写真3 堆肥散布試験ほ場

表1 水稻堆肥施用試験における収穫物調査結果

区名	精玄米重 kg/10a	同左比率 %	m <sup>2</sup> 当り 籾数 ×100	屑米重歩合 %	千粒重 g	検査等級
堆肥施用区	486	105	315	8.1	23.2	2等の中 (充実不足)
慣行区	464	100	328	10.5	22.5	2等の下 (青未熟)

### (3) カンキツ補完品目の選定と実証

関係機関で構成する園芸担当者連絡会議を設置し、山川地区におけるカンキツ経営を補完する推進品目の選定について検討した。果樹については、キウイ、スモモとの複合経営類型を策定した。野菜については、野菜栽培基礎講座を地元女性を対象に開催して野菜栽培の機運を高めた結果、ナバナ30a、博多蕾菜5aが新規作付された。この生産、販売実績をもとに、補完品目としての検証を行い、JA、市と連携し選定した品目の作付推進を図る。



写真4 野菜栽培基礎講座



写真5 ナバナ共同収穫

## 参考資料

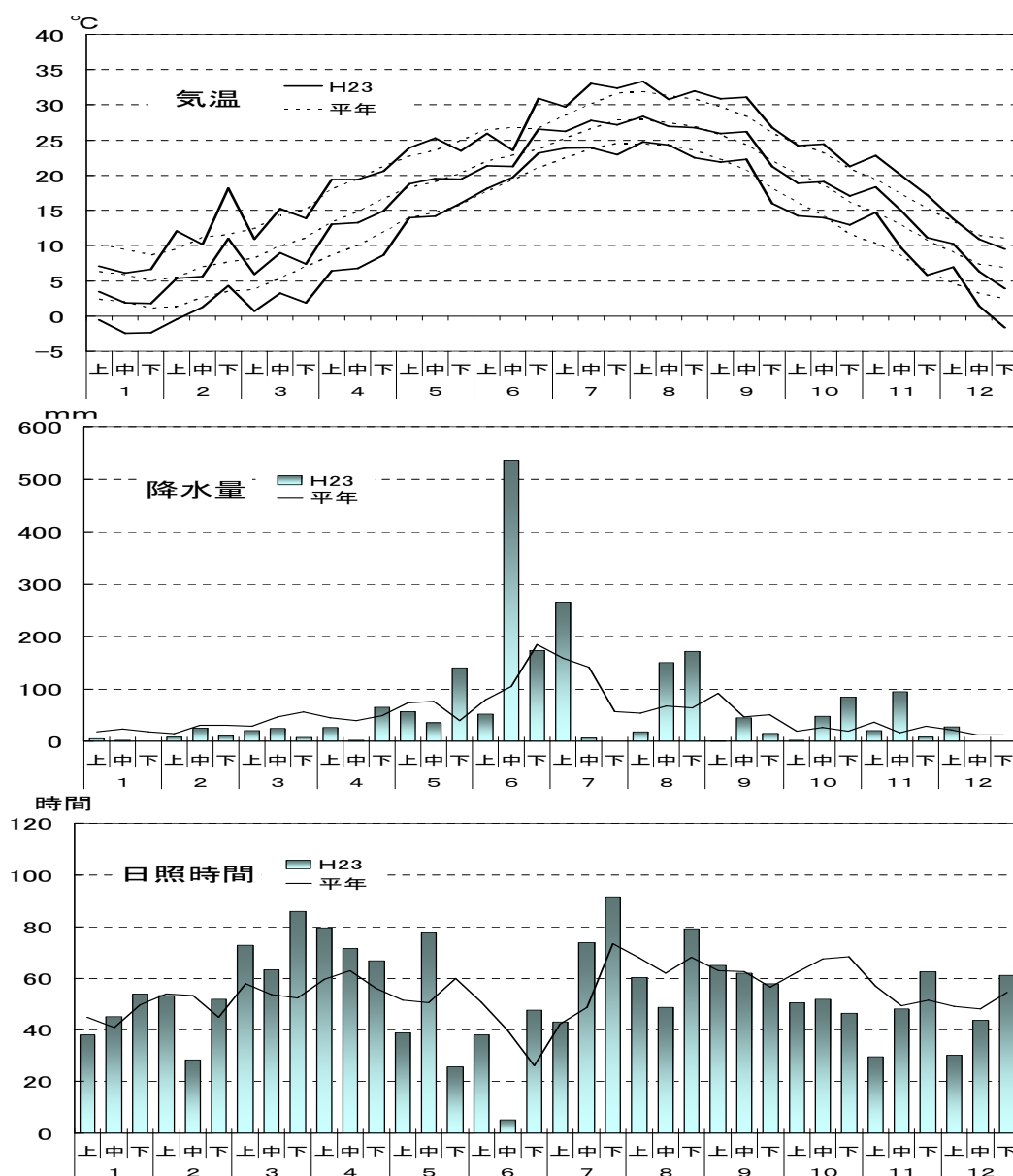
### [ 1 ]平成 23 年気象概況

本年の管内の気象は、年明けから春先の低温、梅雨期の多雨、秋の高温寡日照が大きな特徴である。

年平均気温は 16.0℃で平年並みだったが、月別気温では1、3、4月で平年より低く、特に1月は平年より3.0℃も下回った。反対に11月は平年より高く、2.2℃上回った。

年降水量は 2,148 mm と平年を上回った。特に梅雨期の降雨が多く、6月の降水量は平年の2倍以上を記録した。

年日照時間はほぼ平年並みだったが、3月は平年より多く、5、6、10月は平年よりも少なかった。



(大牟田アメダスデータ)

## [2]平成 23 年度気象災害の発生概況

### 麦の被害（品質低下、収穫遅延及び収穫不能）

23 年産麦の生育は、冬期の気温が低かったため平年より遅れ、成熟期は平年より 4 日程度遅く、大麦の「はるしずく」が 5 月 25 日頃、小麦は「シロガネコムギ」が 6 月 4 日頃、「ミナミノカオリ」は 6 月 9 日頃であった（成熟期の 2 日後頃がコンバイン収穫開始時期とされている）。

しかし、麦の収穫期である 5 月下旬～6 月中旬は、降水量、降雨日ともに平年より多かったため収穫可能な日が少なく、雨による麦の品質低下や収穫遅延、及び「シロガネコムギ」の一部と「ミナミノカオリ」では収穫不能となるほ場もあった。管内 5 市町の最終の小麦未収穫面積（普及指導センター調べ）は、485ha（福岡県全体では 876ha）であった。

特に 6 月 10 日～12 日にかけての大雨の影響が大きく、この雨の前後で、小麦の品質は大きく変化した。大雨後収穫分は穂発芽粒やたい色粒が多くなり品質が低下した。検査等級は、大麦の「はるしずく」がほとんど 2 等であった。小麦は、「シロガネコムギ」は約 8 割が 1 等で、残りが 2 等であった。「ミナミノカオリ」は一部 2 等であったが、ほとんどは規格外であった。

なお、麦後の水稲作付けについては、麦わらが乾燥していないため予定外に麦わらのすき込みをするほ場が多くなり、一部の収穫不能田では、麦子実も一緒にすき込むほ場もあった。そのため、普及指導センターでは、JA と協議して、麦わら等をすき込んだほ場における施肥や水管理の栽培管理指導を行った（P 6 の内容を参照）。

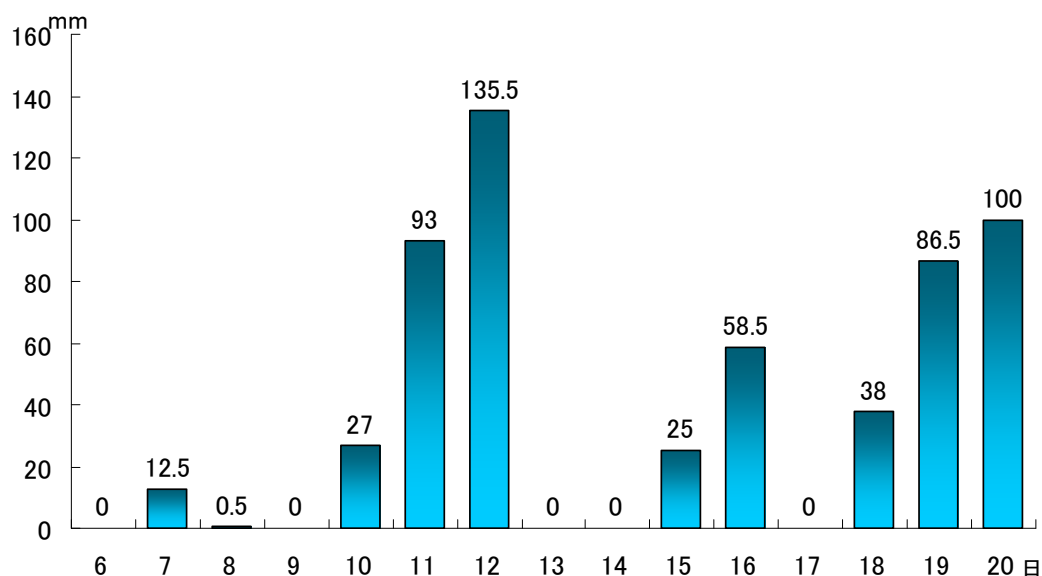


表 1 6 月 6 日から 6 月 20 日まで 15 日間の日別降水量(大牟田アメダスデータ)

※ 収穫時期の降雨日が多く厳しい気象条件であった。

### [3]平成23年度現地情報一覧

No	登録日時	係名	表題
1	4月18日	野菜花き課	「めしおせ」ってなーんだ
2	5月12日	果樹係	おいしいブドウができたよ
3	4月4日	果樹係	若さと行動力で産地を盛り上げる！
4	5月22日	青年農業者班	若き担い手が考える経営戦略
5	5月23日	果樹係	飛躍的な作業の省力化と結実向上対策に学ぶ
6	6月8日	野菜第二係	「あまおう」の産地強化にむけて
7	6月13日	野菜第一係	柳川で「よかばんも〜」体験ツアー開催
8	6月23日	果樹係	おいしいスモモ「貴陽」を届けるために
9	6月28日	畜産係	九州管内系統枝肉共進会入賞を目指して
10	7月8日	水田農業係	生産組織のステップアップに向けて
11	7月12日	果樹係	おいしいスモモ「貴陽」出荷中です
12	7月14日	花き係	「春のトルコギキョウ」品質向上に向けて
13	7月15日	花き係	若い力で農業を盛り上げる
14	7月27日	地域係	新しい農業経営をめざして
15	8月10日	畜産係	黒毛和種の優良子牛生産地を目指して
16	8月12日	地域係	雇用型農業経営研修会を開催
17	8月17日	地域係	農業を始める「はじめの一步」！
18	8月17日	野菜第一係	農業青年が知識や技術を切磋琢磨
19	8月18日	野菜第二係	イチゴ新規生産者講座を開催
20	9月2日	地域係	志を持って目標の実現を！
21	9月15日	地域係	我が家の農業経営は、まかせて！
22	10月13日	地域係	農業の担い手確保に女性の力を活用
23	10月13日	地域係	地元消費者に安全な農産物を

No	登録日時	係名	表題
24	10月13日	地域係	地元農産物の美味しい食べ方を提案します！
25	11月1日	地域係	めしおせプロジェクト稼働中！
26	11月1日	果樹係	美味しいキウイフルーツ「紅心(こうしん)」出荷中！
27	11月2日	野菜第一係	地域に適した野菜の探索
28	11月3日	果樹係	イチジク「とよみつひめ」の産地化をめざして
29	11月18日	地域係	山川町に来んね！見らんね！食べていかんね！
30	11月30日	花き係	ダイアンサスってどんな花？
31	12月7日	野菜第一係	安全・安心農林水産物制度説明会を開催
32	12月1日	地域係	地元農産物活用の可能性を探る
33	12月2日	花き係	知っていますか？みやま市で栽培される多彩な花々を！
34	12月27日	野菜第二係	イチゴ有明連絡協議会青年部研修会を実施
35	12月26日	水田農業係	生産組織リーダー研修会を開催
36	12月26日	水田農業係	麦すき込み田の水稻栽培管理をこめこめ研修会で発表
37	12月27日	水田農業係	米づくりを通して小学生が学んだものは？
38	1月24日	地域係	女性の農業経営参画促進を目指して
39	2月6日	野菜第一係	春を告げる野菜、お目見え！
40	2月8日	果樹係	食の安全の次は、自分の安全も！
41	2月9日	地域係	柳川市家族経営協定調印式が開催される
42	2月9日	地域係	魅力ある商品デザインを学ぼう
43	2月14日	地域係	地元農産物の食べ方を提案します！パート2
44	2月20日	花き係	ガーベラの産地化を目指して
45	2月20日	花き係	大阪トレードフェア参加

平成24年2月20日現在



#### [ 4 ]平成23年度主な展示ほの概要

対象作物	課題名	市町村	結果概要
水稲	「ヒノヒカリ」における新肥料の利用による収量、品質の向上	柳川市	「ヒノヒカリ」の基肥一発肥料において、速効性肥料と緩効性肥料の割合を3:7(慣行は5:5)とした新肥料を供試した結果、慣行より収量が6%増加し、品質も1等上(慣行が1等中)と格付けされた。
	「元気つくし」における収量・品質の高い緩効性基肥一発肥料の選定	大川市 大木町	「元気つくし」の基肥一発肥料において、緩効性肥料の肥効時期を変えたものを比較した結果、「元気つくし」には全量S100タイプの緩効性肥料を用いたものが収量・品質ともに最も優れた。
	「つやおとめ」の収量・品質安定のための施肥法の再検討	みやま市 瀬高町	減農薬・減化学肥料栽培用ブランド品種「つやおとめ」を高地力地区にて、基肥を減肥した場合、慣行と収量は同等となったが、1.85mm調製では5%多収となり品質がやや向上する傾向であった。
	麦稈すき込み時の水稲栽培管理技術の検証	全域	麦収穫時期の降雨により麦稈処理が遅れ、水稲作前に麦わらをすき込んだ場合の管理法を検証し、①初期の浅水管理②「ヒノヒカリ」までの品種では基肥増③「ヒノヒカリ」以降の品種の基肥は慣行量④「元気つくし」はすき込み田でも収量良好の可能性あり等の効果を確認した。
	地力が低下した基盤整備田における「夢つくし」の減々栽培における堆肥施用の効果	みやま市 山川町	中山間の基盤整備により地力が低下したほ場での「夢つくし」減農薬、減化学肥料栽培において、完熟堆肥2tを施用すると、等級は2等となったものの、登熟が向上し、千粒重が重くなり収量は5%多くなった。
ナス	優良系統現地実証試験	みやま市 柳川市	仕立て法を現行の4本仕立てから3本仕立て等に変更することで、現行品種並の収量が得られることが明らかとなった。
	天敵導入試験	みやま市	半促成ナスで天敵(スワルスキーカブリダニ)の導入推進を図った結果、6件の生産者が導入し、うち4件で成功事例を得られた。
	高収量技術試験	みやま市	苗を接ぐ際、穂木を従来よりも1節高い位置で採穂して台木につぐことにより、現行よりも主枝の生育が促進することで初期収量が増加することが明らかとなった。
イチゴ	電照資材の検証	大木町	白熱灯に代わる電照資材として、蛍光灯、LEDを試験した。白熱灯と同じ条件で使用した場合、蛍光灯、LEDは、白熱灯に比べて1月以降の芯葉の伸長が劣った。資材に合わせた点灯時間等を検討する必要がある。

対象作物	課題名	市町村	結果概要
イチゴ	育苗期における強草勢管理が苗質および果数に及ぼす影響	みやま市 柳川市	置肥を2～3回施用すると、1回施用に比べ、苗の葉やクラウン径が大きくなり、その結果、頂果房の花数が増加した。3.5寸ポリポット育苗を行うことで、3寸ポットに比べ、苗のクラウン径が大きくなり、年内収量は向上した。
ダイアンサス	県育成品種ダイアンサス「紫香の舞」、「ピンキーカジュアル」定植適期時期の検討	柳川市	定植時期及び摘心時期を変えた収量調査の結果、定植時期が早いほど収穫が早く始まり、12月までの収量も多くなった。年内に収量と品質を確保するためには7月上～中旬に定植、7月下旬～8月上旬に摘心する作型が適当であることがわかった。
ダリア	冬春ダリアにおける適正な追肥方法の検討	みやま市	二番花の奇形を防ぐために一番花着蕾中の追肥を行う必要があり、それによる一番花への悪影響が懸念されたが、一番花の品質には問題ないことがわかった。現在、二番花の奇形発生率および品質を調査するために、引き続き試験中。
トルコギキョウ	冬春トルコギキョウの開花促進に用いる白熱電球代替光源の実証	みやま市	ハロゲンランプを用いた区では白熱電球区と同時期に一番花が発蕾しており、同等の花芽分化促進効果があると考えられる。現在、切花の品質を調査するために引き続き試験中。
ミカン	ミカン「北原早生」の高品質果実生産技術の検証	みやま市	本年度の気象条件下では、葉果比15～20の摘果は従来基準20～25より果皮の紅が濃く、糖度が高く、浮き皮も少ない傾向となり高品質化が図られた。
ブドウ	ブドウ「ハニービーナス」の無核化の検討	みやま市	400gの房を目標にするには、セットは4cm程度で、摘粒時の軸長7cm位、段数13段位40粒位が適当であると考えられる。GA（ジベレリン）処理は、結実を考えると1回目GA25ppm+フルメット5ppm、2回目GA25ppm+フルメット10ppmが適当と考えられる。
イチジク	イチジク黒葉枯病防除体系の確立	柳川市	アビオンEを混用したアミスター10フロアブル、トップジンM水和剤、ダコニール1000をローテーション散布する防除体系は黒葉枯病に対して有効である。
	シートマルチ設置によるイチジク「とよみつひめ」の果実品質向上対策	みやま市	収穫期間中に土壌にシートマルチを被覆することにより、果実品質は果皮色が優れ、糖度も高い傾向が見られた。また、腐敗果の発生も少ない傾向にあり、正品率も高くなった。



福岡県行政資料	
分類番号 P A	所属コード 4703516
登録年度 23	登録番号 0002